

## トリビアはなぜトリビアなのか

——宗教と哲学のめざすもの——

川 添 信 介

### はじめに

学長先生からのお話では、今日は人生に役に立つ話をしないとならないようですが、そうなるかどうかは私の話の内容というよりは、皆さん方次第です。

タイトルを「トリビアはなぜトリビアなのか——宗教と哲学のめざすもの——」としました。私は西洋の中世哲学の歴史を勉強しています。その中でも、専門はスコラ哲学、十三～十四世紀の哲学です。日頃、何をしているかというところ、ラテン語の文献を毎日

読んでいます。ラテン語はもともと古代ローマで使われていた言葉ですが、中世においても学問の言葉として生き延びていたわけです。フランス語、スペイン語、イタリア語などのもことになる言葉です。中世の具体的なイメージを持ってもらうために有名な西洋の思想家二人、アウグスティヌスとトマス・アキナスの絵を出しました。アウグスティヌスは四、五世紀ですから、日本だと卑弥呼の後、大和朝廷ができる少し前です。トマス・アキナスは十三世紀の人で、光華女子大学の建学の精神のもととなっている親鸞聖人と同じ時期の人です。私が専門としているのはトマス・アキナスあたりの思想です。

宗教講座に呼ばれてきたわけですが、哲学が専門で、宗教は専門外です。ただ西洋の中世哲学はキリスト教という宗教と極めて深く結びついていました。中世は社会全体がキリスト教の強い力のもとにありましたので、哲学をやるにしても、宗教的な側面、具体的にはキリスト教ですが、そういうものについて少しは勉強している。私自身はキリスト教徒ではありませんし、そういう意味での信仰は持っていませんが、知識としては一応勉強しているわけです。「哲学と宗教はどういう関係にあるか」とい

### トリビアはなぜトリビアなのか

うことについても、当然、関心の一部に入っています。

#### トリビアの語源

「トリビア」というのはタモリがやっているあの番組の題名のトリビアです。無駄な知識の話です。「なぜトリビアはトリビアなのか、無駄な知識がどうして無駄だと言えるのか」という話からはじめて、「どういう知識、どういう内容であれば役に立つと言えるのか」という話に引っくり返すことにしたい。そのことと、哲学という人間が昔からやっていること、それとあらゆる民族、文化の中で普遍的にどこにもある宗教という現象、そういう二つの事柄がどういうふうに関係しているかという話をしてみたいと思います。

「トリビア」という言葉はご存じだと思います。あれだけ有名で視聴率の高い番組です。しかし、トリビアとはもともとどういう意味か。これはラテン語ですが、それが英語として使われています。トリビアというのは複数形で、単数はトリビウム

という言葉です。トリビウムという言葉は「三つが一つになってまとまった、三つ組の一つのもの」という意味です。それがどうして「些細な、つまらない、役に立たない、無駄な」という意味になったのか、というところには歴史がある。トリビアという言葉そのものには「無駄な、役に立たない」という意味はないのです。西洋の思想の歴史の中でそのような変化が起きた。そのことを少しご説明申し上げたいと思います。

古代ギリシアから基礎教養、政治にかかわる普通の市民（奴隷ではなく）がみな持っていた方がいい、持つべきだと考えられていた基礎教養科目が七つあって「自由七芸」と呼んでいます。ラテン語では「アルテス・リベラーレス」で、英語では「リベラル・アーツ」、つまり今日の大学で言えば教養科目のことを言います。

七つというのは四つと三つに分かれていて、四科は「数学的な学問」で「算術」「幾何」「天文」「音楽」です。音楽がなんで数学なのだとお感じになるかもしれません。音響学のことだと考えればいい。オクターブは周波数が倍です。物理的な量を数値化するとオクターブは倍になる。音声の間に数学的な関係があるので、音楽も数

## トリビアはなぜトリビアなのか

学的な学問と考えられていたわけです。天文についても、天体の動きには幾何学的な秩序があるので、数学的と考えられていました。

もう一つは三科、これがもともとのトリビウムです。三科というのは数学に対しては「言葉に関する学問」で、「文法」、「弁論術（相手を説得するための技術）」、それにもう一つが「論理学」で理屈にあった形でものをしゃべる、語る、考えることにかかわる学問です。この三つがトリビウムで、古代ギリシャ・ローマの時代からあったわけです。それが中世の十二〜十三世紀のヨーロッパで大学という教育制度ができて、現代の教養科目まで続いているわけです。

その中世で大学ができたときに、学部あるいは学問体系が二層になったのです。まず「学芸学部」で自由七科目を学ぶ。基礎教養科目ですから、誰でも知っていないといけない。「法学」「キリスト教神学」、「医学部」が上級の学部ですが、この三つの専門課程に入る前に誰も知っておかないといけない学問を学ぶ場として学芸学部があった。その中で基礎になるのはトリビウム、三つの言葉に関する学問だったわけです。「法学部」「医学部」「神学部」は上級の学部、職業教育なんです。医学部は医者にな

るため、神学部はお坊さんになるため、法学は官僚になったり、社会で役割を持っための職業教育。社会の中に出て職業につくための学問だったわけです。だからそのためにやるべき基礎的な学問は、職業教育のための「準備の学問」という位置づけになった。もちろん四科、数学的な学問も教えられたわけですが、とりわけ三科はベシツクな、誰でも知ってないといけないという位置づけを持っていたので、「基本的に誰でも知っていて、それだけでは何の役にも立たない学問」として三科が位置づけられた。このことから、トリビアは「役に立たない、それだけではつまらない」、そういう意味に変わっていったのです。

この変化の中に大事なことがあると思います。つまり、職業に就くということが代表的ですが、世の中に出ていくために何か役に立つ知識がある一方、そうではない知識は無駄な知識だと、そういう言葉の使い方の変遷・変化が生じ、もともと「無駄」という意味ではなかったのに、歴史の中でトリビアという言葉はそういうふう「役に立たない知識」と低い位置づけにされてきたわけです。しかし大事なことはここから先で、「世の中で生きていくのに役に立つ知識だけが、役に立つ知識だと考えるべ

## トリビアはなぜトリビアなのか

きかどうか」、そこが大事な問題になります。

### 知ることの意味

そこで、トリビアを二つ上げたいと思います。一つは、去年九月、「六六ヘエ」をとったものですが、「教師が授業中、生徒を笑わすためのテクニクを教える本がある」というトリビア。大して評価の高くないトリビアですが、これも確かに笑える。僕は教師ですから「ああそうなのか」と思って、このトリビアという知識は教師の中には役に立つと思う人もいられるかもしれません。そして二番目のトリビアは「ひな人形の三人官女のうち真ん中だけ人妻」というもので、「七九ヘエ」をとっています。そこそこ、高い評価です。

「トリビア一」は教師という職業を持っている人にとっては役に立つ。それ以外の人にとっては、ただ笑えるだけです。ですが、「トリビア二」に関しては、それはほとんどの人に役に立たない。ただ、人形屋さんには役に立つかもしれません。ひな人

形を売っている人には。ただ、それはごく少数なので、ほとんど誰にとっても役に立たないと言ってもいい。この二つのトリビアを考えてみて「トリビアの泉」という番組がなぜ人気番組として成立しているのか」をまず考えたい。もちろん、嫌いな人、面白くないと思う人もいるでしょう。しかし、相当な視聴率をとっていますから、世の中の多くの人は「あれは面白い」と思っているわけです。どうしてそう思うのでしょうか。

あの番組の冒頭に、アリストテレスの「すべての人間は生まれつき知ることを欲する」という有名な言葉がでてきます。「すべての人は知ることを欲するからトリビアを聴いて喜んでるんだ、面白い、楽しいと感じる」。確かにそういう面はあるでしょう。何か役に立つ。たしかにその時は面白いし、その翌日くらいまでは、友だちとしゃべる時のネタになる。そういう使い方はできるでしょうね。「三人官女の真ん中は人妻だ。あれ面白かったね」と翌日の会話のネタで出てくるし、スムーズな人間関係を結ぶ手段になるかもしれない。その場限りと言えばその場限りで、二日後には忘れていくかもしれない。そういう知識がトリビアです。



## トリビアはなぜトリビアなのか

ところで、もう一つ同じアリストテレスの言葉として有名なのは、「人間は社会的な動物だ」という言葉です。もともとは「政治的」と訳してもいいのですが、「人間はひととのつながりを持っていないと生きていけない動物だ」という意味です。この二つの言葉はどちらも人間の本性について語っています。たしかに何か知ったら楽しいということは、人間に共通している。社会的な動物であることも共通していると思いますね。そのことをアリストテレスが言っているわけです。

しかし、知ることのもう一つの目的を考えてみたいわけです。生きている我々一人ひとは誰でも、たとえば家庭の中で生きている。この大学の中で生きている。ある地域社会の中で生きている。いろんな場面を分けることができますが、その全体を「世界」と言っている。「生きている環境」と言っている。生きるということにはそういうことが含まれていますから、「自分がその中で生きている環境を理解したい」と思うのです。そういう欲求が人間にはある。ここで「理解する」ということがどういうことかが問題になります。それはいまは置いておいて、人間が「理解したい」というのはなぜか。もっと根本的には、「そういう世界の中でよく生きたい、幸せ

に生きたい」という欲求は皆、持っている。「幸せにこの世界で生きるために、自分が生きている周り」と、その中で生きている自分自身を理解する必要がある」と考える。「ものを知る」ということの目的は、最終的には「よく生きること、幸せに生きる」という目的のためにある」と言っていいたいだろうと思うのです。知ることは、それ自体が喜びであるだけでなく、よく生きるために意味があるのです。

### 「理解する」とは

それでは、「知ること」と「理解すること」はどう違うのでしょうか。いろんな言い方ができると思いますが、一つの特徴だけを申し上げておきたい。「ものごとを理解する」、つまり「ただ知っているだけではなく理解している」と言うためには、必ず「関係」の知識がいる。「Aということを理解している」と言うためには、Aを知っているだけではなく、「AがBでないこと」、「AとBとの間の関係」を知っていないと、Aを理解したことにならない。ドラえもんを知っているだけではなく「ドラえも

## トリビアはなぜトリビアなのか

んとは何か」ということについて理解していることには、必ず「ドラえもんは、のび太じゃない」とか「しずかちゃんじゃない」ということが必要です。言うまでもないことですが、まずそういうことが含まれている。同時に「ドラえもんは、のび太の友達だ」ということ、つまりドラえもんと のび太の「関係」を知ってないと「ドラえもんについて理解した」とは言えない。単独のただ一つのことをポツンと知っていることと違って「ものを理解している」ということは、そのものにまつわる他のものとの関係をいろいろ知っているということの意味する。

大事なことは理解することの方で、単独の事柄を知っていることとは違う。そのことが大事だと申し上げたいわけです。このことはあまりあたりまえすぎて、我々はほとんど意識しなくても、これまで学んできたことも、これから学ぼうとしていることも、学ぼうとしている中身を理解することの一番根本にはこういうことが含まれていると言っている。それはどんな事柄を学ぼうと、そのように言っていると思います。

このことを、さきほどの「三人官女」のトリビアで考えてみましょう。たとえば研

究の主題として平安時代の結婚制度を理解しようとする。そのことをただ知るだけでなく「理解しよう」としたら、どういことが中身として含まれていないといけないか。結婚と結婚以外の男女の関係は違うということを知ってないといけない。また、社会的な階層があつて貴族がいたり、普通の庶民がいたり、奴婢のような人がいたりするわけだから、そういう階層と結婚や他の男女関係の制度との関係・無関係も当然知ってないといけない。そうでないと平安時代の結婚制度を理解したことになる。他にもたくさんあります。宗教との関係とか、日本以外の国や文化の中での結婚制度との比較とか、平安時代と違う時代における結婚制度と平安時代の制度がどう違うかなどもある。平安時代の結婚制度という一つの事柄、記号で言うとなとAという一つの事柄の理解のためには、必ずAではない宗教の問題、別の時代の問題、別の地域の問題を含んだ時に初めて、Aという平安時代の結婚制度というものがどういものかというのを理解したことになるのです。

そうすると、その理解の中身にさきほどのひな人形の三人官女というトリビアで示されたような一つの知識が含まれる可能性がありますね。三人官女のうち一人が人妻

トリアはなぜトリアなのか

になっているのはなぜなのか。どうしてそういうふうひな人形をつくらないといけなかったのか。そこには平安時代の結婚制度の影響があるに違いない。だから平安時代の結婚制度を理解するためには「トリア二」の「ひな人形の三人官女の一人は人妻」という知識が役に立つ可能性があるわけです。あるいは逆の方向、つまり最初にタモリの番組で「トリア二」を知ったとします。その場限りで「ああ、面白い」と思って「そうなの」で終わってしまう人もいますが、場合によっては「そのことはどういうことだろうか」と、そっちらから話を始めて「どうしてひな人形の三人官女の一人は人妻になるんだろう」と考え出した時には、今度は遡って話を広げて、平安時代の結婚制度全体について知識を持つことを求めるようになるかもしれません。最初に目的として、平安時代の結婚制度を知ろうとした時から「トリア二」にたどりつく人もいるだろうし、「トリア二」を聴いて逆向きに平安時代の結婚制度を調べてみたいと思うようになる人もいるかもしれない。

こういうわけで、今日のタイトルについてのさしあたりの答えはこうなります。断片的な知識（「断片的」というのは「AならAをAだけで考え、Bとの関係で考えない」ということで

す）は、そのままでは無駄であって使えない。それでは、「使えない」というのは何に使えないのか。それは、根本的には「幸せに生きるために」は使えないのです。そのことは無駄な知識は知識のまま断片的に止まる限り、理解に届かない。「理解した」と言えない。つまり逆に言うと、理解というのは「全体としてのネットワークをなすような知識のまとまりの中で成り立つ」と言えるわけです。

### 全体である自分

「それがどうした？だからどうなの？」。そうかもしれませんがね。しかし、「自分と世界を理解すること」のためには、「理解というのは断片的ではだめですよ」と申し上げたい。それにはもう一つ先の目的があつて、それは「この世界の中でよく生きること、幸せに生きること、楽しく生きること」かもしれませんけど、そのために断片的ではないネットワークをなすような知識と理解が必要になる。

それでは「生きるということはどういうことか」ということが問題になるわけです

トリビアはなぜトリビアなのか

けど、一般的に言うのと、生きるということは、さしあたりは多くの局面を「何々として生きる」ということです。僕自身のことです。申し上げますと、僕自身は「ヒト科、ヒト属の一個体」として生きています。犬として生きていない。しかし動物ですから身体を持っていて、崖から落ちたら石ころと同じように落ちるわけです。そのことは「ヒト科のヒト属の一個体は生物の一つ」だということに基づく。また、私は家庭では「妻の夫」であり「子どもの父親」として生きています。それ以外にも息子の「PTAの会員」として、ものを頼まれたりしてやることもあります。「京都大学の教員の一人」として仕事もしている。授業をやったりして生きています。「労働組合の組合員」でもあり、「教員」というある一つの職業を持つ「労働者一般のうちの一人」です。また、研究者としては「学会のメンバーの一人」として生きています。さらには、こんなおじさんなのにドリム・カム・トゥルーの大ファンで、「ファンの一人」としてレコードを聴いたりコンサートに行ったりする生活もある。「日本の国民」ですから、税金を払う義務を負って生きています。「地球人」でもあって、地球全体の中に生きていますから、「地球という一つの環境の中で生きている生物」です。

もつと言えば「宇宙全体の中の一員」としても生きています。普通、我々はこんなふうに分けて考えることはないわけですが、「何々として」というあり方を引きずりながら生きています。それを一つひとつの局面、「生きることの一局面」として切り分けることが、一応できるわけです。

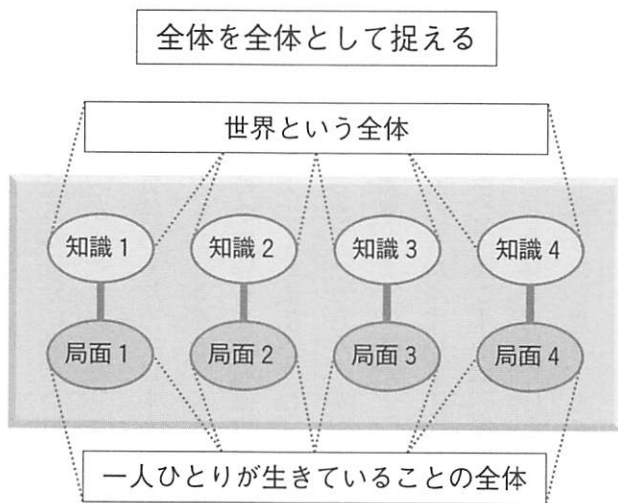
だからこそ、人生はうまくいかないわけです。どうしてうまくいかないか。多くの場合、いま分けたような局面の間に「対立」が起こるからです。調和しないことが多いわけです。皆さん方も同じでしょう。皆さん方も人間ですが、たとえば「京都光華女子大学の一員」である責任と権利を持っています。家庭では、ご両親の「娘である」という立場があります。恋人のいる人は「恋人にとっての相手」という生き方の局面がある。皆さんもいろんな局面、複雑に違った側面を抱えながら生きています。僕のことでは、僕が学生が夕方になって研究室に来て「論文を見てくれ」と頼まれるとします。「もう帰りたいんだけど、八時近いし」。その時に、家庭では父親や夫としての私がいまいますから、「早く帰って、たまには家事の手伝いもすべきだ」という義務感がないわけではない。同時に京都大学の教員としては、「学生の面倒を



## トリビアはなぜトリビアなのか

見る、指導する、世話をする」ことは私の義務でもある。労働組合の組合員としては、働く者の一人である自分に過重な負担のかかること、働きすぎはよろしくないという考えを持っている。ドリカムのファンとしては、さっさと帰って新しく出たCDを聴きたいという気持ちも片方ではある。

そういう同じ一つの事柄を、つまり学生が夕方にやってきてどう対応しようかと考える時、自分の中のいろんな局面の間に齟齬、対立があるわけです。だから相互の調整をして「ちよつとすまないけど、明日にしてくれ」と言うのか、家に電話して「ちよつと遅くなるから」と言うのか。ドリカムのファンとしては聴くのを諦めるのか。どうするかを調整します。また、これはその日・その場限りのことですが、昨日の僕と明日の僕ともつながっていますから、僕の人生全体のうちのある一日をどうやって、どういうことをして過ごすかは、僕の人生全体とつながっている。だから極端に言うと、生きることの全体を考えないとただ一つの振る舞いもできないことになってしまふ。皆さん方もそうだと思う。もちろん、毎日朝起きて、顔を洗って、朝ご飯を食べるといった習慣化していることは、ものを考えなくても身体は多くの場合動きまわります。



いつもいつも悩みを抱えて生きているわけではない。しかしながら、習慣化した行動だけで一度も考えることや決断を迫られないような生き方をすることも稀で、たぶんありえないと思います。

さしあたりのところで、皆さんもどういう職業につくか自分で決めないといけない。なりたい職業に就く場合もあるし、仕方なくいやいや選ぶ職業もあるでしょう。自分の人生の全体を考えて、どの職業を選ぶか決断する時が来ますね。職業を決めることは人生の中では相当大きなことですけど、それ以外でもごく小さなことで対立がある場合にも、単独のその

## トリビアはなぜトリビアなのか

事柄だけではなく、その事柄に関係を持つ周辺の事柄を全部考え合わせる必要があると思います。

このように我々は「何々として」、つまり「ドリカムのファンとして」「PTAの会員として」「大学の教員として」といった、「として」を抱えているわけです。ただ実際は、一つの場面は一つの「何々として」で済むことも多い。家庭の中では「父親として」振る舞っておけばいい。そして、そういう局面に応じて、父親として持つべき知識がある。「局面一」を考えると。皆さん方にとつての「局面一」は「京都光華女子大学の学生である」という局面かもしれません。そのためには京都光華女子大学がどういう規則によつて動いているか、何が義務とされているかという知識が必要です。それは当然、そうなる。「何々として」生きる限りは「何々として」という局面に応じた「必要な持つべき知識」が出てきます。それで十分なこともあるわけです。しかしながら、私たちは局面を無数に抱えている。そして、無数の局面を抱え持っている人間は一人の人間です。一人ひとりが生きているということは、その全体の中で「局面一」があり、「局面二」があり、「局面三」がある。そして、それぞれに応じた「知

識」がある。京都光華女子大学も世界の一部です、皆さん方が生きる環境の一部です。その京都光華女子大学は五条葛野大路にあるという地理的な位置づけを、世界の中で持っているわけです。光華女子大学について知ることは「局面一」で、「学生としての局面」を持っている皆さん方にとって「知識一」の対象は京都光華女子大学についての知識ですが、それは世界全体の一部なのです。世界全体を切り分けて、ある一つの面だけをとって皆さん方は「光華女子大学の学生として」生きているわけです。「家庭」という一局面をとらえたら、また違うことになる。「恋人との関係」をとらえたら、また違ってくる。複数の無数に分けられる局面を切り分けて、それぞれ一つの知識を持たなければならない。それは世界に「についての」知識であるとは言えでしょう。

しかしながら肝心なのは、「この全体を一つにまとめるようなものが必要だ」という点なのです。局面を分けて切り離された断片的な知識、つまり「局面一」に対応した「知識一」がある。「局面二」に対応した「知識二」がある。「知識一」を「知識二」と関係づけしないで「知識一」だけに止めていると断片的なのです。私は「父親と

## トリビアはなぜトリビアなのか

しては早く帰るべきだ」という判断をしなければならぬ。そうすべきだと思ふし、そう感じる。しかし教員としての別の「局面二」では、「学生の指導をしないとイケない」と考える。しかし、一つの行動というアウトプットを出すのは、全体で一人の人間である私です。図の枠で囲んだ全体、個々の知識をつなぎあわせて「一つにまとめていくようなものをめざす」、そういうものを志向せざるをえないのです。つまり問題なのは「全体をとらえる」ということです。

自分が生きるといふのは、いろんな局面を持って抱えている「全体である自分」が生きていることです。そして、その自分は「世界の全体」の中で生きている。哲学はそのような「全体にかかわろう」とする特徴を持っている。哲学という人間が昔からやってきた営みはそういうものです。部分的、断片的な知識の間に「関係」を見つけて理解しようとする。専門的知識というのは、分けられた一局的な知識です。最初に述べたリベラル・アーツ・自由七芸との関係で言うと、「職業のための知識」であり、中世の大学では「神学部」「医学部」「法学部」が専門学部としてあったように、社会の中で生きていくための職業を身につけるための知識というものが専門的知識です。

哲学はそのような意味での専門的知識とは違うということになります。

つまり、哲学は最終的に「世界の中でよく生きる、全体としての世界の中で、全体としての一人の人間がどうやってよく生きるか」にかかわる。医者である人は医者としての知識を持ってないといけないけど、医者でない人は医者としての知識を持ってない。弁護士である人は弁護士として法律の知識を持つ必要があるけれど、弁護士でない人は法律についての知識を持つ必要はない。少なくとも専門的な意味での知識を持つ必要はない。物理学者が持っている知識は、世界の物理的な側面についての知識です。それらは個々の切り分けられた知識であって、それをみんながみんな持っている必要はない。一部の人が持っていればよろしい。それぞれの局面に応じて、その局面に関する知識を精緻に組み立てたものが、一つひとつの個別の学問として成立しているわけです。人間の経済活動にかかわる面についての知識を整理したものが経済学です。人間が生きている環境の物理的性質についての知識を整理したものが物理学であったり、化学であったりするわけです。区分けされた専門的な知識は、場合によっては「職業」として持つべき知識になるわけですが、それに対して哲学は断片的な知識を横断

### トリビアはなぜトリビアなのか

する形で「全体についての関係づけを持つ」とするので。

だから、人間は生きていく限り、哲学的な思考を必要とする。そうでなければならぬと言えらるだろうと思います。そのことの裏返しですが、「哲学しないためにも、哲学は必要」なのです。昔の有名なキケロという人が言ったとされている言葉ですが、もつと遡れる考えかもしれません。「哲学なんて知ったものか、そんなもの私には関係ない」と考える人はいる。皆が職業的な哲学者になる必要はない。大昔からそうです。職業的な哲学者の数は限られている。しかし、人間が「人間の全体としてまとも

に幸せになりたい」と思っているのを考える時には、その「全体」について考える必要がある。その考えたあとの結論として「哲学なんか役に立たないから、いらぬよ」という「哲学をしない決断」をするためにも、「哲学なんかいらぬ」というふう

に考える前提に「すでに哲学をしてしまっている」ことになるのです。「哲学はいらぬ」という判断が、単にさぼっているだけだったら別です。真剣に人生に向き合わないのであれば、哲学しないままに横をすり抜けていくことはできるでしょう。しかしながら、少しでも自分の人生についてトータルに「どうやったら幸せになるかを考え

よう」とした時には、少しでも真剣にそういうことをめざした時には、それを「哲学」と自覚しなくても、哲学に触れていることになる。その結果「哲学なんかいらない」という決断をするにしても、それ以前に「哲学をってしまった」から「哲学はいらない」という結論が出るわけです。そういう意味で「哲学は誰にとっても必要だ」ということになり、哲学として意識されているかそうでないかは無関係なのです。

そうしますと実は、「職業としての哲学者とは何なんだ」、「僕のように「哲学で飯を食っている人間は何なんだ」ということが問題です。「職業としての哲学」は、これまでの話の流れからすると、本質に反したヘンなものなのです。ある人生の一面として哲学者だというのはヘンな話なのです。いろんな局面の全体を考えることが哲学だから、僕が哲学を教える者として大学で給料をもらうことは、本当は哲学の本質に反するのかもしれませんが、ですが、それをあまり突き詰めると自分の首を締めることになるので、それ以上は突っ込みませんが、本質的にはそうかもしれない。哲学で飯を食うのはおかしい話です。



トリビアはなぜトリビアなのか

## 哲学と宗教との関係

ここまででは、私は専門が哲学なので哲学について話をしましたが、宗教講座にお招きいただいているので「宗教との関係」も少しお話ししたいと思います。私の専門がキリスト教という宗教と深い関係を持った時代の哲学ですので、日頃からこの問題について考えることが、ないわけでもないのです。

宗教というのはいろんなタイプの宗教があるので、一概に宗教と括ることは問題があると思います。ですが、キリスト教に代表されるような一神教の宗教、あるいは浄土真宗でも似たところがあるかもしれませんが、これらのタイプの宗教はすでに提出されている（聖書に書かれているとか、「歎異抄」や「教行信証」に書かれているとか）「答えを信じる」ことから出発して、その答えの意味を理解しようとする。さまざまの関係をつけて、世界全体を理解しようとするのです。それに対して哲学の場合には、「何か答えがある」と信じてはいますが（哲学の側にも「信じる」ということがあると思います）、は

はじめから答えは与えられてはいないわけで、自分で見つけないといけないわけです。大雑把で雑な言い方ですが、そういうふうになんか一つを分けることができるかもしれないと思います。

よく言われることは「信じること」と「知ること」のちがいです。宗教は「信じる」ことから、哲学は「知る」ことから出発する。「信」と「知」の区別がある。「信仰」と「理性」がある。理性とは理屈の通った仕方でものを考える能力です。しかし、多くの宗教にはどこか理屈ではわりきれない部分が含まれているのが普通です。理性だけでは割り切れないものを含んでいるわけです。しかしながら今日、私がここでお話ししたいことの中には、この区別はあまり重要ではない。ここでは「宗教と哲学の共通性」を強調したいと思います。

宗教も、目的は或る意味では哲学と同じなわけです。「どうしたら幸せになれるか」という、そういう欲求は人間に共通で、そのことを認めないわけにはいかない。自殺したいという人でも幸せになりたいと思っっている。自殺する方が好ましい、自分にとって幸せな状態になると信じているから自殺するわけです。殺人を犯すことでも

### トリビアはなぜトリビアなのか

そうです。殺人を犯すことが自分にとって幸せを生み出すと思うから、殺人を犯すわけです。だから、どんな人間のどんな行為も振る舞いも、「幸せになろう」という一番基本的な欲求に基づくと言えるわけです。宗教もそういう欲求に根ざすことは間違いない。

哲学というものもそうで、どういうルートで、どういう道具・手段を持って、幸せに近づこうとするかは違うけど、到達しようとしている目的に関しては宗教と共通している。しかも、哲学は「自分の全体を全体としての世界の中において考える」、そういうやり方を基本にすると申し上げたのですが、宗教についても「全体を全体として」だと考えられる。人間のある局面だけの宗教はないわけです。父親としての宗教、父親だけにかかわる宗教、母親だけにかかわる宗教、京都光華女子大学の学生専用の宗教、そんなものはないわけです。少なくとも歴史的に長い伝統を持つような宗教に關しては、「人間全体にとって幸せとは何か」を提示しようとしている。この点は哲学と共通する。特定の局面だけに絞って、その局面だけで幸せになる教えはないわけです。その点で宗教と哲学は、目的のある種の共通性があることは確かです。

そこが科学とは違う。科学は「分けられた学問」でしよう。世界のひとつひとつ個別的局面に限定し、その局面についての「分けられた知識」が科学ですから、宗教も哲学もそういう意味で科学ではない。分けられた局面についての「部分的な知識じゃない」という意味では宗教と哲学は同じなのです。こういう意味で「宗教と哲学のあらゆる種の共通性」がある。方法論が違うし、たどる道が違うので、違いを強調することもできる。決定的に違う、全く違うと見ることもできるとは思いますが。しかし、ここではその方向から見ない。全体として共通の側面がある。共通の持っている側面が大事故だということを申し上げたいわけです。

宗教も哲学も相当に古くからある人間の営みです。宗教なんてほとんど人間が人間に進化して、サルじゃなくなつて人間になつた時から(サルも宗教を持っているかもしれませんが)存在していて、「人間であること」と「宗教を持つこと」は分けられないのかもしれません。それに比べれば哲学はもう少し新しいかもしれませんが、紀元前六―七世紀のギリシアから始まったと言われるくらいだから、つい、この間と言われれば、ついこの間です。それでも哲学は相当に古い、人間にとって一番基礎にあ

トリビアはなぜトリビアなのか

るような営みの一つかもしれません。自然科学などがはじまったのは「ついこの間」です。三百年〜四百年のオーダーの話です。それに比べれば宗教や哲学の営みは人間の本质、人間に初めから備わっている、もとからかかわっているものです。

### 人間とは何か — 生きる希望 —

「人間と世界とは何か」という基本的な問いを出す時には、宗教とか哲学が出てきたのであって、これ自体は時代を問わないかもしれません。しかしながら、我々は特定の一つの時代に生きていくわけで、その時代をどうとらえるかということは無視はできない。そして、いわゆる「情報化の時代」にわれわれが生きていくことは大事なことです。そのことをちゃんと考えておかないといけない。私も日々、コンピュータでインターネットにアクセスします。仕事上仕方ないことだし、欠かせない道具になっていることは間違いない。皆さん方にとっても、情報リテラシーは大学では基本、必須教養科目になっています。インターネットの世界の中で、Googleが提供してい

るいろんなサービスなどをみると（Googleは単なる検索サイトだとお考えになっているかもしれませんが）、最近出た梅田望夫さんの『Web進化論』（ちくま新書）を読んでも、情報をどうやって手に入れて、どう整理するかということの手段は、昔に比べて格段に優れた手段を持っている世界に我々はある。そのことのメリットはたくさんある。しかし注意しないといけないこともたくさんある。私はGoogleの世界に全面的に反対ではなく、うまくいく可能性もあると思いますが、注意しないといけないことは注意しないといけない。何でも探せるようになったわけです。単語を入れて検索したら、世界中にアクセスできますから。サイトになつていない情報もあるわけですけど、昔に比べると格段に「何でも」探せるようになった。

しかし大事なのは検索のチームに何を入れるかなのです。「何を探したいか」ということなのです。情報化の時代は、いわば断片的で相互に関連性がない膨大な知識の蓄積があるわけですが、それをどう関係づけるかという答えは、サイトの中にはない。インターネットそれ自身の中にはないのです。我々はいろんな局面を持って生きていますが、それぞれの局面が持っている膨大な蓄積に関してアクセスできるようにする

## トリビアはなぜトリビアなのか

いるけれども、全体を見通してどう関係づけるかということ自体はインターネットそのものの中にはない。つい余りの便利さゆえに、何が大事かということを見間違ってしまう可能性があるのです。

たとえば、皆さん方が先生が出されたテーマについてレポートを書くとき。その時、Yahoo とかのサイトで与えられたテーマの文献を探されるかもしれませんが。道具が目の前にあるのだから使わない手はない。しかしそれはそのまま使ってはだめです。剽窃ですから。他人の文章をそのまま使うことは犯罪ですから。人の考えがサイトの中にあるわけですが、それをどうつなげるか。インターネットは「そこにその人間の人間たる所以がある」ということを忘れさせる危険がある。その点に気をつけないといけない。利用の仕方について、Philosophy、原則を持たなければ、道具も使えない。そのことを往々にして忘れさせるほどのパワーを持っているので注意しなければいけないことは確かです。

現代の社会をいろんな形容詞で呼ぶことはできると思いますが、「不透明である」ことは明らかです、特に若い人にとっては。僕が皆さん方の歳で、皆さん方と同じよ

うに現代の世界、世の中に生きていたとしたら、あまり元気は出ないと思います。先  
行きどうなるかわからないしね。年寄りたちは辛い目に会う前に死んでしまうからい  
いでしょうが、今から生きないといけない人たちは、希望を持って生きられるか。希  
望を持てるようには思えないですね。我々、少し歳をとった人間の責任として反省し  
なければなりません。多くの若い人が希望を持ってないで、場合によっては犯  
罪的な行為に走ることは、ある意味でよくわかる。そういう不安を抱いて当然の世の  
中だと思います。だからこそとやうべきなのか、少し無理をして希望的に言います。

不透明で不安を与えるような世の中であることはその通りだと思ふ。たとえば年金  
が将来どうなるか。就職できるだろうか。そういう不安は当然お持ちになつていろこ  
とだと思ふ。それは皆さん方一人ひとりの人生にとって重要な局面であるかもしれ  
ないけど、それが皆さん方の「全体」ではない。不安を抱かせるような局面を持つて  
いる世の中であるけれども、それは世界の全体ではない。全体が真っ黒じゃない。自  
分自身の一局面に閉じ困らないでほしいし、あるいは世界の暗く見える一局面だけを  
見ないでほしい。トリビア的であり方、つまり他のものと関係づけなくて全体を見よ



## トリビアはなぜトリビアなのか

うとしない、ある一局面だけに閉じこもろうとする、そしてそこで満足しようとする知識の持ち方・態度決定の仕方、そういうあり方は避けてほしいと、年寄りはそのいう希望を皆さんに申し上げるしかないのかもしれない。つまり、自分の人生と世界の全体について、可能な限り一貫した、筋の通った見取り図を持って、その中で一貫した生き方をする。そういう可能性はいつも残されている。そういう意味で、不安を抱えながらもある種の希望があること、そういう認識を忘れないでほしい。そういう思いを強くします。

### おわりに

そのために今日申し上げたいことは、人間はどうしても目先の、一番関心のあることだけに目を注ぎがちで、それだけが世界のすべて、自分のすべてだと思いがちですが、そうではないということです。「違う局面を全部包み込んだ全体というものが、大事なんだ」ということについて、これは経験が必要で、多少は歳をとらないとわか

らないことですが、将来、皆さん方が「あんな話をした奴がいたな」と思い出しているだけのことがあれば、ありがたいと思います。ここまでにしたいと思います。ご静聴ありがとうございます。

—二〇〇六年五月二六日—